蕎麦の常識非常識

麻薬と貧困撲滅に半生を捧げた

「そば司令官」氏原暉男氏のこと

タイ・ミャンマー・ラオスがメコン川で接する山岳地帯はかつて「黄金の三角地帯」と呼ばれ、アフガニスタン周辺の「黄金の三日月地帯」と並ぶ世界最大の麻薬密造（ケシの栽培）地帯でした。既にタイとラオスは八〇年代にケシの追放に成功していたのですが、ミャンマーは民族紛争が頻発していたためケシ追放に後れを取り国際的な非難に曝され対応を迫られていたのです。

ミャンマーのキン・ニュン国家法秩序回復評議会の第一書記（後に首相）が「ケシ撲滅のための代替作物」支援要請を自民党加藤紘一幹事長（九五年当時）にしたのが事の始まりでした。日本蕎麦協会の会長でもあった加藤氏は農林水産政策に詳しい当時自民党の審議役だった岩倉具三（ともみつ）氏（自民党審議役）に依頼、岩倉は信州大学教授氏原暉男と一緒に「高地に強いソバをケシの代替作物として黄金の三角地帯で栽培し、日本側がそれを買い取る」というアイディアを提言したのです。氏原教授はプロジェクトが持つ社会的意義、日本の対ミャンマー外交の重要性を理解し、単に提言するだけでなく現地へ足を運び、実現可能性を探るためソバの試験栽培（九七年）を始めたのでした。翌々年に氏の信州大学定年退官が決まると、直ちにＪＩＣＡの任期四年の長期専門家として現地（ミャンマー・

シャン州）へ赴くことになったのです。思いがけない人生の転機が訪れたと言えるでしょう。たとえ「三十二年間にわたるソバ研究を世界の農村で生かしたい」という強い希望があったとしても、生活環境が一変するミャンマーでの生活は六十五歳の身には大変厳しいことは容易に想像できることでした。

ここで氏原暉男氏の経歴を簡単にご紹介しておきましょう。

氏原暉男（一九三四～二〇一三年）は京都大学・大学院を卒業後、京大農学部助手、科学技術庁放射線医学総合研究所を経て信州大学農学部へ転進したのは六七年のことでした。農林省からの要請で在来種の収益性アップを目的とした品種改良研究に従事することになり、最初に手掛けたのが「信州大ソバ（しんしゅうおお）」（八五年登録）でした。在来種と比べると大粒で吸肥性に富むだけでなく、対倒伏性、対霜性等の従来のソバが持つ弱点を克服したもので、現在も広く全国で栽培されている優れものでした。それ以降も、チベット国境の高地（標高三八〇〇㍍）から種子を持ち帰った観光用の赤花「高嶺ルビー」（九三年登録）、赤い実を付ける「グレートルビー」（九八年登録）、ルチンが普通ソバの三倍も含有される「サンルチン」（〇二年登録）等々の開発に次々と関わり、いずれもソバの振興に大きく貢献し、品種改良の日本の第一人者となっていたのです。

さてそこで、派遣先であるミャンマーのシャン州ですが、北に中国、東はラオス、南はタイに国境を接していて、ミャンマー十四州の中で最大の面積（ミャン

マー全体の四分の一）を占める、少数民族が集まる人口四七〇万人の山岳地帯（八〇〇～一五〇〇ｍ）なのです。「シャン」の名は当地の多数派民族だったシャン族に因んで付けられたといいます。

氏原は複雑な民族問題が絡み合い、反政府運動が激しいために外国人の出入りを厳しく制限しているシャン州の村々をひとつずつ巡回し、北海道産で早熟・多収が特徴の品種「キタワセ」の栽培方法を文字通り播種から収穫まで手取り足取り教え歩くことから始まりました。地味に乏しい畑でも育つソバは、わずか六十日間で収穫出来る上に、手間もかからないため農家に喜ばれ、一時は収穫量が約二百五十トンにまでに広がり、ケシ栽培をする農家が皆無になった村も出てきたのですが、目標とする「ケシ栽培の一掃」をするにはまだまだ解決しなければならない問題が多くありました。

先ず品質ですが、氏原の熱心な指導の甲斐あって、「日本産と変わらない味」だと認める水準に到達するのですが、現地の輸送体制や道路整備が脆弱であるため、日本へ輸送するのに時間がかかり、その間の温度管理の不徹底などもあって、日本への輸出は年七〇万トンで頭打ちして販売量は伸び悩んだのです。またミャンマーにはそばを食べる習慣は全くなく、自国内の消費拡大は困難を極めました。「そば焼酎」等の開発にも着手するのですが、これとて簡単に見通しがつく問題ではありませんでした。

そんな問題山積の中で、氏原のＪＩＣＡ専門家の任期（四年）が満了しこの国家プロジェクトは終了することになるのですが、氏は「このまま止めてしまえばミヤンマーの人たちが困る」と考え、民間レベルで支援を継続するため、ＮＰＯ法人「アジア麻薬・貧困撲滅協会」を設立し自ら理事長に就任するのです。それから十年、二〇一三年に七十九歳で氏が逝去されるまで、現地消費を増大させるための用途開発や日本における販路開拓等の地道な活動は続けられました。

麻薬撲滅運動はこれで終わることなく、氏の遺志は今日も息女睦子さんにそのまま引き継がれ、ミヤンマー産ソバ粉は「ミヤンマー高原そば」の名で、そば焼酎は「みんがらーば（ミヤンマー語で“こんにちは”の意）」の名で長野県中心に着実に販売され一定の成果を収めているのです。

このような努力に支えられて、ミヤンマーのケシ生産量は大きくは減少方向にはあるのですが、二一年の国軍のクーデター後、一部には換金性の良いケシ栽培に再び手を染める農家が出てくるなどなお一進一退が続いているのが現実でもあります。

しかし困難な条件下にも拘らずケシ撲滅に対して払った氏原の献身的な努力は、今もなお現地の農家の人々から深い親しみを込めてパンジョンコマンダー（そば司令官）の尊称で呼ばれている事をもってしても窺い知れるものであり、農民たちの感謝と信頼の念が如何に大きかったのかを物語っています。

このプロジェクトによって示された対ミャンマー外交における日本の努力は、永久に消えることはなく、世界的から高い評価を得ていることを付言しておきたいと思います。

また「ミャンマーにおける麻薬と貧困撲滅のための代替作物プロジェクト」に身命を賭して挑戦した「氏原暉男」という一人の日本人がいたことを同世代の人間として誇らしく思うのです。